
凸凹キャンディーライフ

ヒラコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凸凹キャンディーライフ

【Nコード】

N6151A

【作者名】

ヒラコ

【あらすじ】

大工の大助はひよんな事から従兄弟にあたる「めい」をしばらく預かる事に。30歳になっても彼女もいない大助にいきなり小さな女の子が…！？暖かな凸凹ハッピーライフ！！

めいとの出会

かあちゃんから電話があつたのは俺が30になる誕生日の前日だった。

「大助っ！あんだどーせ当分一人なんでしょ？！部屋空いてるわよねえ！？」

俺は仕事から帰つてすぐの電話に疲れを感じつつ靴下を脱ぎながらテキトーに返事する。

「んあゝ？まあ空いてるけど何？またリョーコが出て来ちゃったんかい？」

かあちゃんはいきなりさつきまでたた事では無いような声を押さえ、冷静になつた。

「それがねえ…里おじさんが先月亡くなつたでしょう？おじさん、一人暮らしたつたはずんだけど…あの歳で彼女いたみたいでねえ。」

「まさかその彼女を俺んちに置いてくれつてか？（笑）」

俺は笑いながら自体を把握出来てなかつた。

「おじさんの子供がいるのよ…彼女はおじさんを追つて…」

「マジかよ…」

俺はやつと自体の恐ろしさを知る

「で…そのコを俺にしばらく預けるつー話…？」

「ウチは今リョーコの子の世話でいっぱいだし…あんたんちの方が近いし環境良いからねえ。」

で、3日後にかあちゃんが俺んちにその子供を連れて来るらしい。
ん？俺…なんか忘れてねーか？……………！？オスカメスカ何歳か聞いてねえゝ！！！！

そして目を白くさせながらも約束の日が来るのだった。

「…。」

「めいちゃん、大丈夫よ。おじちゃん顔とか悪いけどきつと優しく

してくれるわよ！」

「顔はしょーがねーだろ！しかもあんたがこんな子供に好かれない顔に産んだんだからな！」

俺の目の前に小さくなつて心細そうな目の

「めい」

がいた。どうやら幼稚園の年中らしく5歳で自分の親が死んだ事をわかつていないらしい。

「俺んちでいいのか？」

めいは辺りを見回してから俯きながらコクリと小さく頷いた。

30歳になつたばかりの俺は結婚の気配等無いまま、まだ小さな従兄弟との共同生活が始まつた。

ビールやタバコ、仕事で使う大工道具のような危ない物、もちろんHな本はめいの目に入らない所に隠した。めいの荷物はこりやまたお子様サイズでカワイーピンクのキティちゃん柄。

「めい、キティちゃん好きなんか？」

「おじちゃん、キティちゃん知ってるの！？」

「こりや！おじさんやめい！キティちゃんくらい知ってるわ〜！」
目を丸くしながらこんな事を聞いて来るめいであつたが里おじさんはキティちゃん知らなかったのかな…

俺はめいにめいの両親の事を聞けなかった。今はダメだ。こんな小さな子に俺でもしつくりこない話は出来ない。

「…ねえ」

「おう！なんだ？」

「何て呼んだらいいの…？おじちゃん言うといやつて…」

「ん〜…リョーコンとこの子も大ちゃんだしな…」

「だいちゃん…？」

「んもー！！大ちゃんの良いやい！」

「だいちゃん…トイレ…」

「おっ！あいよ！こつち来いや！」

めいは新しい環境なのか歳のせいなのか自分でトイレに行けないら

しい。だからいつも俺が着いててやる。俺は次の日現場が入ってる事をめいの小便の面倒見ながら思い出した。

「あゝ！！俺明日仕事じゃん！！」

「だいちゃん…どっか行っちゃうの…？めい一人になっちゃうの…？」

めいは心細そうに俺を見ながら言った。

「んゝ…でも安心しろ！一人にはさせん！！」

明日は子供好きな頭領のおかげで現場近くの頭領の家で奥さんが仕事が終わるまで面倒見てくれる事になった。

「大助君、めいちゃんいつでも連れて来ていいのよ？おとなしくて良い子じゃないの。ねえ、あんた。」

「ああ、大助の従兄弟にあたるんだってなあ！！じいちゃんとこいつでも来いよ！」

めいは嬉しそうに手を降ってうちに帰った。

帰り道、奥さんとどんな遊びをしたか等語ってくれた。

「でね、おてだま作ってくれてね、お庭でお花にお水あげてね、幼稚園より楽しかったあ」

…おい、まてよ…？

「めいちゃん…？今…よ…幼稚園…？」

「うん おばちゃんと遊んだ方が楽しかった！」

俺は幼稚園の事を忘れてたんだ…

幼稚園って大変だ！

今日はめいと初めて外食する事になった。めいの希望もあってハンバーグに決定し、俺んちから歩いて15分くらいのレストラン街の中にある。

「めい、決めたかあ？」

「うっ、うん。」

「ボタン押しちまうぞ」

「めいが押すっ！！」

「しょーがねーなあ。今回は譲ってやらあ！」

「だいちゃんおとなげなあゝい！！」

そんなこんなでお子様ディナーBとデミバーグセットを注文。

「ああ！めいちゃんだあゝ！」

後ろからやかましいくらい元気な声でめいの名前を呼ぶ女の子が。

「あっ、ゆきちゃん」

「ねえゝ、なんでようちえんこないのオ？なんでなんでゝ！」

「！」

「こらこらゆき！外で大きな声を出すんじゃない！…あ、すみません！ゆきの父です。」

「あ！どーも。めいがお世話になってマス！」

「お父さんお若いですねえ！！」

「イヤア！！俺はめいの父親じゃあないんつすよお！！」

「あ、すみません！！余計な事言ってしまったみたいで…」

どうやらこのゆきちゃんのお父さん、小林さんはシングルファーザーでゆきちゃんが2歳の時に奥さんを亡くしたらしい。めいと少し状況が似てる。

「めいちゃんはままいないのお？」

「うん。いたけどなんか会えなくなっちゃったみたい。」

「ゆきのまましんじやつたんだって！めいちゃんのままもしんじや

ったの!？」

俺はすかさずその場を違う話題にした。めいに死ぬだとか両親の事は深く教えたくない。

「おっ、肉来たぞお!!！」

「ゆき!!そんな事言つもんじゃない!!めいちゃん、気にしないでね。」

小林さんも気を使ってくれたようでめいも何事も無かったようにハンバーグを美味しそうに食べていた。

俺は帰りに小林さんに幼稚園の事や子供を預けている間の仕事の事をいろいろ聞いた。なにしろ、かあちゃんが、んな事教えてくんなかったもんだから。

「めいちゃんばいばい!!」

「ばいばい。」

「んじゃ、おやすみなさい!」

小林さんは俺に令をして帰って行った。

今の幼稚園は保護者以外は特別な許可が下りないと送り迎えさえ出来ない程厳重警戒されているらしく、軽々しく近所のおばちゃんとかに頼めないらしい。俺の仕事柄、朝から始まり予定どおり作業が進めば6時には必ず上がれる。しかし幼稚園は2時半には終わるし延長保育は6時まで...うう...頭が痛い...

「ん?どした?もうすぐ家だぞ。眠いんか?」

めいは目をこすりながら首を大きく横に振った。めいの性格が少しわかった気がする...

「お前くらいおんぶでも抱つこでも出来るんだぞう?」

それでもめいは目を半開きにしながらフラフラ歩き、家まで自分で歩いて帰った。変な所が頑固で、弱いところは弱い。なんだか俺に似てるなア、とか思いつつ昨日から敷きつ放しの布団にめいを寝かし、めいが来たからか久しぶりのビールで今後の事を考えなくては、と。

ん…？何から考えりゃあいいんだ！？

トラウマは俺がどうにかしてやる！

「うーん…うー、イヤだぁ…」

「めい？大丈夫か？おい！」

めいを引き取ってから一週間が経つが、一昨日くらいから夜中になるとめいはうなされていて、こうやって俺が声を掛けながらお腹や背中をさすると落ち着くんだが…。

「なあ、お前は小さい時うなされてたとかある？」

「俺っすかぁ？どおですかねえ…あつ、でも決まって同じ怖い夢を見てた時期ってありますよ！！大助さん、うなされてんすか？」

「いーや？俺じゃねーよ。」

「えっ？じゃあ…」

「ありがとな！！」

俺は昼飯時に大工仲間に聞いてみたがやはりいろんな人が怖い夢だとか日常のストレスとか言う。やっぱここは頭領の奥さんに頼るか。「そうね…めいちゃん、いきなり環境が変わったわけだし、お父さんやお母さんもいきなりいなくなっちゃったのよ？やっぱりその不安やストレスが原因かもしれないわねえ…」

「どうしたら良いんですかねえ…。俺、うなされて涙流してるめいの姿見るの辛いんですよ。まだ会ったばかりですけどやっぱり俺の従兄弟ですから…」

従兄弟ってこんな大切なもんだとは思わなかった。でもなんだか他の従兄弟よりずっと大切に、家族のように思えてきたのは確かだ。

「寝る前にいつも何してる？」

「えっ？あつ、うーん…テレビをぼーっと二人で見てるか、えーつと…」

「絵本なんかを読んであげたりいろいろ日常の些細な話をしたりしなきゃダメよ。こういう事で子供はストレス発散出来るんだから！」
「絵本ねえ……」

俺は大人の絵本くらいしか買わないからいまいち子供の絵本コーナーに戸惑った。(大人の方の絵本への戸惑いは忘れちゃった。)

俺は頭領と遊んでもらっていたために呼んで本屋に向かった。

「めいはさ、何か好きなあんのか？」

めいはじーっと絵本コーナーを見回し一冊俺に渡した。

「めいさー、これ絵本じゃねーぞ？字イばつかだぞ？」

「いいの。これがいいなあ。これ買ってくれる？」

幼稚園生ってのは絵が好きなんだとばかり思ってたがめいは違ったように《世界の名作》などと難しそうな本を持って来た。(ガキの頃の俺にはとんでもねー本だった)

「めい、寝る前に今日買った本読んでやるぞ。」

「……いいの!？」

「おう！今日はどれが良い？毎日一つずつ読んでやるからな！」

「じゃあね……これ！」

「ヘンゼルとグレーテルか。ふむふむ。よし！はじめっぞ……」

俺はこの話の内容など考えずに読んでしまった。

「お母さんとお父さんはヘンゼルとグレーテルを捨てに……」

「やめてえ……!!もう読まないで……!!」

「おっ……おい!どうしたんだよ……泣くなよ……」

俺はようやく事の重大さに気付いたんだが、めいは泣きやまない。親が子供を捨てる話なんて聞かせちゃいけなかったんだ……俺のくそつたれ……めいはきつと両親が自分の事を捨てたんだと思ってる。今俺はどうしたら……

「めい、ごめんなア。ほれ、抱っこしたる……!そーだ!夜遊びしちゃおう……!」

丁度次の日が二人そろって休日だしレンタルビデオ屋に行き、めいが見たいビデオを借りて夜中まで二人で見た。めいにようやく笑顔が戻って、俺は明日あたり親が死んだり親が子供を捨てたりしない絵本を買いに行こうと思っている。もちろんさっきの本はお蔵入り。

めいの家にあったモノ

めいがうちに来てから二週間、俺はかあちゃんから勧められてめいが住んでいたとされる里おじさんの家に行ってみる事にした。俺んちから車で一時間。頭領の車を借りてめいを幼稚園に送った足で向かう。

「だいちゃん、どっか行くの？」

「おう！買い物にな！」

「そつか…ちゃんと迎えに来てね。」

「約束すつから心配すんなって！」

近いと言っても車で一時間だからなあ…

里おじさんちは一人暮らしだったって言われる割に一丁前に大きく、めいも母親も住んでたんだなあ。と思わせる造りだ。

「え〜つと…めいの物探すか…」

俺は一階の茶の間にあるタンスの引き出しを探す。

めいの写真とか無いんかな…やっぱめいって秘密にされなきゃいけない存在だったのかな…おじさんとは週1ペースで会い、一緒に飲む仲だったしかあちゃんとも仲が良かった。なのにめいの事は一切話さなかった。別に60つつたって男な訳だし彼女が出来ても誰も反対しねーのに…生涯結婚しないって決めてたんかな…

めいのおもちやや赤ん坊の時の服は綺麗に和室の押入れに片付けられていた。

「あつたよ…」

俺は安心した。めいはちゃんと育てられてたんだなあ…良かった…しかしどこを探しても彼女の物が無かった。まるでめいとおじさん2人きりで住んでいたみたいにな…

最初から彼女なんていなかったのかな…じゃあなんでめいが…うーん…

気付いたら12時を回っていて俺はめいを迎えに行かなくては…と

…んんっ！？母子手帳発見！！！！こっ…これはすばらしいアイテムじゃないかあ！！

母親の名前…

「梅野さゆり」

…さゆりさんか…ええっ！？わっ…若い…俺と同年！？おじさんやるなア！！！！

梅野って事は結婚してないんだな…結婚してたら里山だもん…。子供の名前、めい。5月5日生、2890g。42センチか…小さかったんだなあ…さゆりさん…あんたどこ住んでんだ…

母子手帳はそのまま俺の実家に送った。うちに置いてめいが見つけたら嫌だからな。

俺は高速を走りながらいろんな謎を考えたがやっぱわかんなかった。でもあのおもちやの数や、服の数を見ればめいは大切にされてたんだと思えたからそれだけ救われた。

「高林ですケド、めい迎えに来ました。」

「はい。ちよつと待っててくださいね。めいちゃん、お兄さん迎えに来てくれたよー！」

かわいい先生だなア…

「あつ、ありがとうございますア！！」

「めいちゃん、優しいお兄さんで良いね。先生、うらやましいな。」
「うん。じゃあ先生さようならー！」

「おっ…おい！さっきの先生…」

「えみ先生の事あ？」

「えみ先生かあ…」

「だいちゃんスキになっちゃったのお？えみ先生かわいいもんねっ！」

「こりゃあー！違うわー！！」

素敵な先生との出会いもあったし今日はなんだかご機嫌な俺！！め
いも新しい絵本にご機嫌でした。

めいとミートソース

「めいー！メシだぞー！」

「うん！……えー…またマーボードーフ？」

「仕方ないじゃんかあ！男の料理なんだかつさあ！」

どうも男一人暮らしているという毎日の食卓は近所のラーメン屋が牛丼屋、コンビニやカップ麺で済まするのが日常で今まで湯を沸かすくらいしか台所を使っていなかった。しかしめいが来てからなるべく手作りの物を心掛けているんだが、こりやまた大変で…月曜から日曜までチャーハン、マーボードーフ、肉野菜炒め、揚げるだけの冷凍コロッケ、雑炊…のローテーション。それでも仕事仲間に教えてもらいながらメニューを増やしてつてる。

「ねえ、スパゲッティが食べたいよー！」

「えっ！？…じゃあ明日作ってやつから！」

「わーいー！ミートソースが良い！」

返事しちゃったけどイマイチ作り方が…。茹でるだけだよなあ…う…明日佐藤に聞か。えっ！今度はミートソースつか！？作った事無いっておかしいっすよー！」

「苦手なんだよー！すまねえ！教えてくれ！」

「教えるも何もパスタとソース、売ってますよ！そりやもうあつという間に出来ますから高林さんでも作れますよ！なんたってソース温めればいいだけですからねエ！」

今はそんなハイテクな物があるんだなア。と、単に俺がバカなんだとも分らず佐藤の説明に関心するばかりだった。とりあえず普段は通り過ぎるだけのスーパ－のパスタコーナーへ足を運んだ。

「いろんな太さがあんだなあ…これうどんと違うのか…めい、普通の太さで良いよなあ…？」

「うん！ミートソースだよっ！ミートソースっ！！」

「わかってらあ…！にしてもミートソースも結構種類があるナア

…」
捨てるのが面倒だからという理由もあって、缶ではなくパックのを選んだ。

「上にかけるやつはあ？チーズ！！」

「粉チーズか！ええつと…乳製品コーナーなんかな…」

初めてのパスタコーナーで時間がかかり、すっかり日が暮れちゃった。

「めい手洗って来い！」

「だいちゃんもだよー！バイキンってコワイんだよー！」

「はいはい。じゃあ手伝え！…って言っても熱湯ばつか使うし危ねえからテレビ見てな。」

「おなかへったあ。早く作ってよあ？」

「あいあい。ほらお子ちゃまは向こう行っただー！」

さあ！取り掛かるか！初めてのスパゲッティー！一人暮らし始めてはや１１年。手作りと言えば納豆御飯程度の俺が３週間前からずっと家庭料理なんてっ！！こんな家庭的な俺を求める綺麗な優しい女性はいませんかアゝ！？

つと、いろんなどーしよーもない妄想をしているうちに完成。

「出来たぞー！」

「わあ！スパゲッティーだあ！」

こんなに喜ぶか！？

「ぱぱがね、スパゲッティー作ってくれたんだあ。でももう作ってくれないのかな…？」

「そうなんだ…」

そっか…里おじさんがよく作ってたんだなあ。めい、おじさんが大好きなんだなあ…

「よーし！めい！お前が食べたい時は俺が作ってやるぞー！お前の父ちゃんより旨いの作ってやつからなあ！！！」

「ぱぱのおいしいからだいちゃんじゃ勝てないもんねー！」

「ぜってー勝つもんね！なんたって俺は料理の鉄人だぞー！」
「てちゅ、てえーつじん…？」

そんなこんなでこれから俺はいろんなメシを作れるようになんきやいけない事になってしまった訳で、めいの絵本とともに料理本も増えるだろうなー。なんて思っで、本棚買わなきゃとか考える今日この頃。

そっぴや、もうすぐ夏服になるけどめいの夏服荷物に入ってるんか！？

服選びは大変だ！

「だいちゃん！おーきーてっ！！洋服買ってくれるんでしょー？」

「んー…まだ8時じゃねえか…寝かしてくれい…」

「だあーめだよ！お出かけするの！ほらっ！顔あらってきてー！」
最近めいはこんな調子で俺を起こしてくれる。だんだんお姉さんになつてきたのかな。お姉さん越してうるさいおばちゃん…まあ、起こしてくれたり晩飯作るのを手伝ってくれるのはありがたいんだがな。

だんだん暑くなつてきて周りも半袖になつてきてるしめいの夏服も出してみたんだが子供の成長つてのは早いみたいで去年のはヘソが見えそうなくらい小さくなつてた。女の子が着るようなもんなんてわからないけど、普通の家庭で買っているような可愛い服を買ってやりたいと思っている。

「GAP…MIKI HOUSE…？ANGEL BLUE…？…
いろいろあるんだなア…」

「ねえっ！これすごくカワイイ！」

「スカートか。やっぱ女の子だなあ。げっ！！これ一万もすんのかよ！」

「ダメ？ダメ？」

「もーちよつと見てみないかア！？もつと良いものあるかしんねえぞー！」

子供の服って俺のTシャツの10倍くらいすんだな…恐ろしい…
とりあえず休みがてらにお茶しようって事になつて一旦外へ。ぬぬっ！これは安い！そーいやさっきのGAPやらMIKI HOUSEやらつてのはブランドだよなあ…だから高いんじゃないか！
今頃気付いた。あー…買わなくて良かった…。俺はチェーン店の安い服屋を見つけてホッとした。さっきの値段じゃあ今日は3着程度

しか買えんわ…

とりあえず俺はコーヒー。めいはリンゴジュースを頼み、一服してから店に行った。「めい！好きな選べよー！！いくらでも買つてやる！」「やったあ！」

めいは大喜びで半袖5枚とジーパン2枚、ワンピースも2枚選んだ。これで2万いかないなんで安過ぎないか！？

「あとねえ、パンツとシャツと…水着！」

「えっ！？水着イ！？」

「そうだよ！幼稚園で夏は水着がいるのっ！」

「さっきの店じゃあ売つてねえよなあ…」

「スーパーに売つてたよお！」

最近のスーパーってなんでも売つてんだなあ。と関心しながら家の近くのスーパーへ。

「これがいい！ねえ、だいちゃんこつちこつち！これカワイイ！めい絶対これにする！」

「4800円…女の子の水着って高いなあ…まあどーせいるんだし。サイズ大丈夫かあ？試着してみろよ。」

「だいちゃん、パンツも脱ぐの？」

「いや！試着だからダメだろ！」

「んゝきつい気もするけど…」

「水着つてピチツとするもんだろ。俺も海パンはピチピチだったし。」

「じゃあこれがいい！」

めいは決めるのが早くて助かる。でも一度良いつて思ったものは絶対放さないから口出し出来ねえんだなこれが。

家に着く頃には二人共クタクタで、今日はしょうがないから近くのコンビニ弁当で済ませた。風呂沸かすのも面倒で風呂好きのめいは申し訳無いが今日はシャワーで済ませてもらった。

下着類のついでに買ったパジャマを早速着て、10時には二人揃って眠りについた。

親って大変なんだなあ…金の方はめいを引き取る時におじさんの遺産をもらったから大丈夫だけど。俺なんだかずっとめいの保護者でいいや。いつかは俺から離れていくめいの事を思うと急に寂しくなった。風呂もいつか一緒に入るの嫌がるのかなあとか。洗濯物一緒に洗ったら不潔がるとか…

めいの気持ち

少し遅れての衣替えで、朝からめいは新しい服に御機嫌だ。

「支度出来たかあ？あ、今日は幼稚園じゃないからカバンとかいらねえぞ。」

「今日幼稚園ないの？」

「ほれ、開園記念日だよ！！先生に言われてないんかい？」

「そうだったあ！！じゃあどこ行くのっ？」

「俺は仕事だから今日はゆきちゃんの家に行ってもらおっかなって思ってたけど。」

「ゆきちゃんと遊ぶー！！」

昨日幼稚園に迎えに行つた帰りに小林さんに丁度誘われて今日はめいを預かってもらう事に。手ぶらじゃ悪いからコンビニで子供が喜びそうな菓子とピンクのウサギのトランプを買って行つた。「じゃあよろしくお願いします！6時には仕事終わるんで現場近いし6時半には迎えに来ます！！」

「御預かりしますね。めいちゃんは蕎麦食べられますか？お昼は蕎麦にしようと思ってるんですけど、アレルギーは大丈夫でしょうか」
「すいません…まだ一緒に蕎麦は食べたこと無いんでわかんないんです…」

「めい、おソバ食べれるよ！！」

「じゃあ良かった！！」

「すいません、じゃあお願いします！」

俺はめいを小林さんに無事預けて現場へ。

「ゆきちゃんババぬきできる？」

「同じ数字をすてちゃうやつ？」

「うん！うさキチのトランプでしょう！！」

「いいよー！めいちゃんくばってえー！！」

「うん！」

「ねえねえ！めいちゃんのお兄ちゃん何さいなのお？もうおじさん？けっこんしてるのお？」

「けっこんしてないんだってえ。だいちゃんもうすぐめいのお父さんになるかも。」

「えー！？なんでっ！？無理だよー！」

「だってめいのパパもママも、もうめいの事スキじゃないんだもん。だからあたしももういいのー！だいちゃん優しいし、顔ゴリラみたいだけどスキだよ。」

「ふーん。でもゴリラのお兄ちゃんめいちゃんのお父さんじゃないくて…えーっと…あっ！じゃあお母さんは誰になるのお！？」

「知らない。あたし新しいお母さんじゃない。めいのママももういない…めいはだいちゃんだけでいいの！！」

俺はめいがこんな話をしているのも知らずに、仕事にとりかかっていた。子供って怖いもんで、俺達大人が想像する子供の会話よりずっと大人なんだなア。両親の事は触れるべきだけど、ショックを受けるめいの事を考えるとその話は避けたくなる。

めいがまさか自分が嫌われて捨てられたんだと思っっているとは…俺はバカなくらい鈍感だからめいの気持ちを理解しているつもりで出来ていなかった。仕事が終わって迎えに行くとめいはなんだか元気が無くて…

「めいどうしたんだア？」

「ウチのゆきがまた余計な事言っただけですみません…」

「いえ！子供同士の事ですから気にしないでください！！今日は本当にありがとうございました！！」

とりあえずめに落ち込んでいる理由を聞く事に。

「なア、どーしたんだ？ゆきちゃんと仲良く出来なかったんかい？」

「ううん。」

「じゃあどうした？」

「別にいい…」

俺はその場にいたから何とも言えなかったが、やっぱり喧嘩にしても沈みすぎで。

あゝ……！どうしたらいいんだア……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151a/>

凸凹キャンディーライフ

2010年10月10日02時01分発行